

# 東幡豆漁業協同組合

調査団体名	: 東幡豆漁業協同組合	団体代表者名	: 石川金男
設立年	: 1950(昭和25)年	対応してくれた人の名前	: 石川金男
団体URL	: <a href="http://www.katch.ne.jp/~higasihazu-gk/">http://www.katch.ne.jp/~higasihazu-gk/</a>		
活動拠点	: 愛知県西尾市東幡豆町	調査員	: 丹羽健司、洲崎燈子
取材日	: 2015年1月21日	レポート作成者	: 丹羽健司

## 活動内容

東幡豆町の小学生たちはもとより、県内外の子供や大人に「前島で自然とにらめっ子～干潟生物セミナー～」はじめ各種の海洋教育プログラムを提供している。

まず、①干潟に足を踏み入れる。②何か(貝やカニ、ゴカイ、生き物、風景…)を発見する。③それからおもむろにレクチャー開始…1)三河湾の現状(貧酸素隗、赤潮)。2)干潟の生き物(豊かさ、食物連鎖)。3)干潟の機能(浄化作用、アサリの浄化実験、命のゆりかご)…④そしてマテ貝採りやアサリ掘りを体験して、場合によってはバーベキューというお楽しみもついている。これらのプログラムを通して参加者は、山から海のつながりの大切さや干潟の機能、海の恵みを五感と科学で知ることができる。

## キャッチフレーズ

山川海、自然の循環が一番大事！

## 会のモットー(何を大切にしているか)

「海辺の子供たちが目の前の海のことをあまりに知らない。東幡豆では目の前に渚の生物の宝庫「前島」があり、島につながる干潟が広がっている。干潮で現われた干潟を歩いて渡り、アサリやマテ貝を採り、島から振り返ると自分たちの暮らす町の素晴らしい風景が見える。まず、それをさせたい。渚や干潟、磯との接し方を知らない。まず、海辺の子らに海の恵みや浜辺に暮らすことの素晴らしさを伝えたい。」と石川組合長。そして「こういうことは好きでなきゃできん！」と熱く語る。

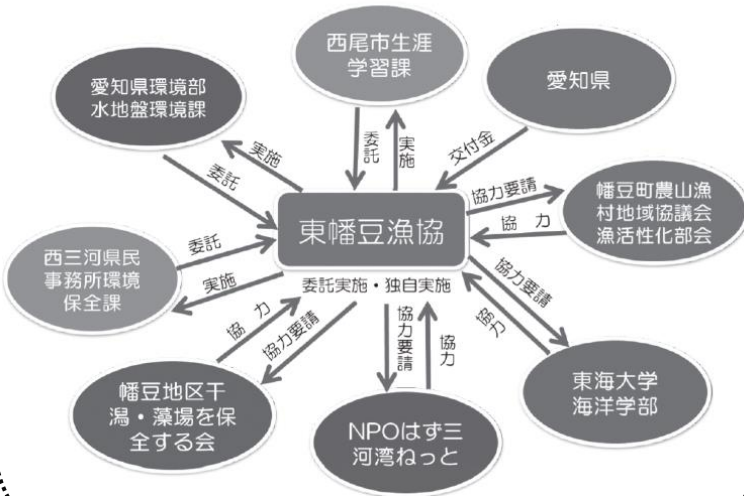
## 設立から現在に至るまで変化したこと

2003年頃から東幡豆保育園、2009年から東幡豆小学校を対象に「ふるさと幡豆の海の自然観察学習」を、2006年頃からは「ふるさとワクワク体験塾」で無人島探検や漁業体験、生き物学習、干潟観察などを関係機関と協力して企画し実践してきた。フィールド提供や漁船・魚介類の提供から石川組合長自ら講師を務めるなど漁協の自主的なボランティア活動的に取り組んできた。その内容は干潟や浅場の役割や赤潮や貧酸素隗発生要因についての学習、アサリの水質浄化機能から潮干狩りと試食まで、当初の自然観察や漁業体験的なイベントから急速に深化している。

2015年3月には矢作川流域圏懇談会のつながりで矢作ダムの堆砂を活用してトンボロ干潟付近の一角に人工干潟を造成することが実験的に始まった。今後山から海までつながるシンボリックな活動として浜辺からのバケツリレーによる搬入・造成イベントを夢想中。その後の経過観察などまで山から海までのつながりをメインにした学習の場になろうとしている。

## 連携している団体・専門家・自治体など

海洋教育における漁協の取り組みと機能をめぐって—愛知県東幡豆漁協を事例に—



東海大学紀要海洋学部「海—自然と文化」12-1-12-22(2012年)より

担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

潮干狩りは8月初旬で終わる。子供たちの夏休みにもっと前島やトンボロ干潟に来てもらいたい。前島には休憩所もあるので観光資源としてもっと活用したい。

## 現在直面している課題

- ①海洋教育の常駐スタッフがほしい。
- ②上流から砂が来ない。海底の砂が固くなっている。柔らかく小動物が潜れるやわらかい砂が必要。砂が流れないと水も死ぬ。

## 今後やってみたいこと

山に「林間学校」があるように、前島に「海浜学校」を作りたい。

山から海までのつながりや干潟の機能、磯の生物の豊かさ、そして漁業の大切さと醍醐味を伝える場、しっかり体感できる場を作りたい。それがいつか漁師を育てることにつながると思う。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

海や干潟のこと、あるいは山から海までのつながりに関心を寄せる人たちはいっぱいいるはず。それらの人たちをあつめてこういう活動の応援団になってほしい。

## プログラムの一例

時刻	内容
10:00～	東幡豆海岸集合・説明など
10:30～	干潟生物セミナー(東幡豆漁協組合長)、マテガイ採り
12:00～	昼食(バーベキュー、アサリ汁) 海の世界学習(アサリの浄化実験など) 質疑応答・意見交換
13:30～	三河湾ミニクルージング
15:00～	バス乗車・出発

東海大学紀要海洋学部「海—自然と文化」12-1-12-22(2012年)より

## チームオリジナルの質問

<質問内容> 海洋教育を続けてよかったことは?

<答え>

子どもたちは干潟や磯で海に触れると確実に変わり、海に親しみを感じてくれる。特に地元の子らは島から陸を眺めると感動してくれる。

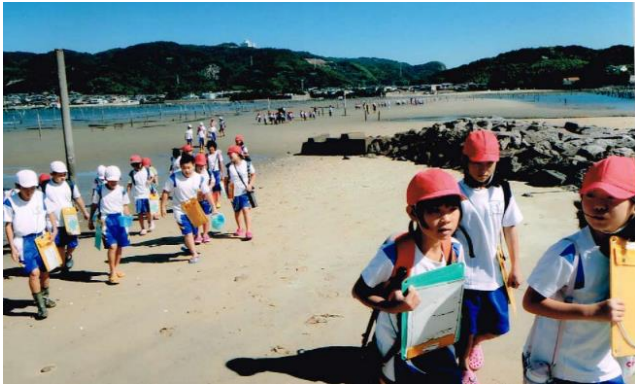
## 取材者の感想

この取り組みは東幡豆漁協の取り組みというより石川金男氏のライフワーク、漁協の業としての取り組みでなく石川金男個人の使命感が漁協や関係団体を巻き込み突き動かした成果だと思った。孟子曰く「至誠にして動かざるものは、未だこれ有らざるなり。」

## その他、伝えたいこと

山には山の働き、川には川の働き、海には海の働きがある。山と川がしっかり水や砂の循環を行えば、海はそれを受け止める。もっと、実際の海に浜辺に、干潟に足を運んでほしいし、海からも山に出掛けたい。現場で空気を吸い、景色を眺めながらつながっていきたい。続けることで子供たちには確実に伝わっていくが、これからは漁業の当事者たちこそが理解を深め、より多くの人々に働きかけていくことが必要と痛感している。

写真



左上:トンボロ干潟を前島に向かう子供たち 左下:石川組合長のレクチャー 右上:潮干狩り 右下:石川組合長